



## 渡邊 博美

一般社団法人東北経済連合会 副会長

### 「道徳」と「経済」の両立

2011年3月11日の東日本大震災から3年半が経過しました。「長い時間の大地震」、「巨大津波」、そして「安全神話を覆した東京電力福島第一原子力発電所の事故」。いまだ福島県では、12万5千人の人々が、かけがえのない故郷を離れ厳しい生活を送っています。

当初、社員やパートナーの安否の確認、生活物資の不足、情報の混乱、そして放射能からの避難指示など、経験のない事態に翻弄されました。肉親や知人を失い、住み慣れた家や故郷から離れざるを得ない人たちの瞳は不安の中で宙をさまよっていました。その上仕事を継続できなくなれば、地域社会は崩壊してしまうとの危機を感じたのは、企業人の全てでした。

危機を克服するための軸足を模索していた時、学生時代にゼミで取り組んだ渋沢栄一の研究が頭をもたげました。わが国の近代国家のビジョンを掲げ奔走した栄一は、幕末の動乱期にフランスへ渡りヨーロッパの圧倒的な豊かさ、西洋の近代的な文明を築いている原動力が「合本主義」（個人の小さなお金が集まって大きな資金となり大事業をも動かす銀行や株式会社の仕組み）ということを知り、日本初の銀行や日本郵船、札幌麦酒などを設立します。多くの民間企業を創設育成し、経済活動を活発にしますが、国民の真の豊かさのためには道徳と経済活動の両立が大切と考えていました。彼が小さい時から親しんだ論語の教えの「不義によって得た富は浮雲のようなものだ」を信念としました。三菱財閥の創始者である岩崎弥太郎は「才能のある者が専制的に経営する独占資本」を実践していましたが、ある時、渋沢栄一を向島の料亭に招き屋形船の酒宴の席で「君と僕が手を握って仕事をすれば日本の実業界は思うがままだ。協力していこう」と誘います。これに対し栄一は基本的考えの違いを感じ猛反対し、袂を分かちます。栄一が「道徳経済合一説」と呼ばれる理念の実践に生涯をかけた話は有名です。

後にマネジメントの神様と呼ばれたピーター・ドラッカーは昭和49年に刊行された代表的大書「マネジメント」の日本語版序文のなかで次のように述べています。「率直に言って私は経営の『社会的責任』について論じた歴史的人物の中でかの偉大な明治を築いた偉大な人物の一人である渋沢栄一の右に出るものを知らない」。そこには「経営の本質を『責任』にほかならない」という主題を共有した経済人の思いがあったのだと思います。

東北の経済人として真の復興を成し遂げるため偉大な先人たちの教訓を大切にタフな道のを歩んでいかなければと思います。正にこれからが正念場です。

(福島県商工会議所連合会 会長・わたなべ ひろみ)